

『勸学』 陶淵明

この四句だけなら日本人好みの立派な教訓詩

勸学 陶淵明

勸学

陶淵明

盛年不重來

かんがく 勸学陶淵明と盛年重ねて来らず

一日難再晨

いちじつまたあした 一日再び晨なり難し

及時當勉勵

ときおよ 時に及んで 当に勉励すべし

歲月不待人

さいげつ 歲月は 人を待たず

【意解】

若い、血氣盛んな年頃は、過ぎ去れば二度と来ない。また一日のうちに朝は二度と繰り返して来ない。

それゆえ学ぶべき時にはよく努め励んで、充分に勉強しておかなければならない。歲月は人を待ってはくれず、いつの間にかどんどん過ぎ去ってしまうのだから。

【字解】

勸学 勉強することを勧める。

盛年 血氣盛んな若い時代。壮年。

晨 朝に同じ。

及時 しかるべきときに。チャンス逃がすことなく。

当 ……するのが当然だ。再読文字。

勉励 努め励む。

原詩は「皆で楽しむのも大切」と

「勸学」の原詩は十二句からなる五言古詩「雜詩（十二首の二）」で、その先頭から八句で述べているのは、「人生ははかない。だから、親しい人と酒を囲んで大いに楽しむ」といった楽天的な内容である。

先頭から八句の読み方と全体の大意を紹介する。

雜詩十二首 其の一

人生無根蒂 人生根蒂無

飄如陌上塵 飄として陌上の塵の如し

分散逐風轉 分散して風を逐うて転じ

此已非常身 此れ已に常の身に非ず

落地爲兄弟 地に落ちては兄弟と爲る

何必骨肉親 何ぞ必ずしも骨肉の親のみならんや

得歡當作樂 歡を得れば当に楽しみを作すべく

斗酒聚比鄰 斗酒比隣を聚めん

以下、冒頭の四句が続く。

【大意】

人の命は、しつかりとつなぎ留めておく根やヘタもなく、まるで都大路に舞う塵のようだ。

風のまにまに転び、別れ、散ってしまう。この身はすでに無常のもの。

しかし、この世に生まれ落ちれば皆兄弟。どうして肉親だけが特に親しむべきものか。

うれしい時に楽しむのは当然。一斗の酒で隣近所を集め、大いに飲もう。

若い、血気盛んな年頃は、過ぎ去れば二度と来ない。だ

から、チャンス逃さず、何ごとにつけても心ゆくまでやるべきだ。歳月は人を待ってはくれない。たちまち去ってしまうものだ。

この最後の四句が、一般的には一絶句として切り離され、青少年に対する勉学の教訓詩として、違和感なく広く愛唱されているわけである。

「雜詩」十二首の連作は陶淵明の晩年、隠居を初めて十、二十年を経過する五十、六十歳ごろの作とされており、そのころの考え方の一端がうかがわれる。

【作者】

陶淵明（三六五～四二七）

六朝時代の東晋から宋への王朝交代期の人。潯陽柴桑（広西省九江市）に生まれる。名は潜、字を淵明・元亮という。家は南方豪族で曾祖父は東晋の名将陶侃。しかし淵明誕生ころには没落していた。父を早くに亡くし、二十九歳から役人となって州の祭酒（県教育長）、鎮軍参事、彭沢県令を歴任したが、「我豈能く五斗米の為に腰を折りて郷里の小人に向かわんや」（わずかな俸禄のために同郷の若僧の査察官に腰を折ることはできない）と四十一歳で官を棄てて故郷に帰り、ずっと田を耕す生活を送ったので、世に田園詩人と言われる。

帰郷の決意を述べた散文「**帰去来の辞**」では「**帰去来兮、田園將に蕪れなんとす、胡ぞ帰らざる**」に続けて、郷里での田園生活の楽しみを語り、すべてを天命として受容し、自然の変化に任せて充実した内面生活を送ろうと述べている。酒を好み五言古詩の「**飲酒二十首**」など酒にまつわる詩も多い。「**雑詩十二首**」にも、その生き方を示している。

五十六歳の時に東晋が減んだが、彼は節を守り次の宋王朝には仕えなかったので、後世の人々によって**靖節先生**と諡された。

陶淵明は中国の山水詩の系譜の上で重要な位置を占める詩人と言える。

秦・漢帝国が減びると、それまでの価値観が崩壊。魏・晋王朝の交代期には権力者**司馬炎**の儒家思想の悪用による圧迫で、政界人・文人が次々に殺されたりした。そのなかで、世俗を離れて抽象的な問題を追究する「**清談**」にふけり、琴をひき酒に酔う**阮籍**・**嵇康**ら「**竹林の七賢**」など、秩序に消極的に抵抗し、嘲笑しつつ自然の中に入り込んでいく「**隠者**」たちが出てきた。さらに抽象的・神秘的傾向は「**遊仙詩**」として仙界への憧れにつながり、一方で老莊思想の奥深い道理の思索にふける「**玄言詩**」も広がっていた。

このような現実生活から遊離した詩風に対する反省から、詩の中に山水、自然を通じて自分の世界をどう発見し表現するかを考え、独自の境地を確立したのが陶淵明

である。

陶淵明は「仕官」と「退隠」の矛盾を「官を棄てる」こと、「田園に入る」ことで克服した。束縛から離れて田園を自ら耕作し、村人と交流し、高級官吏とも交際して贈答の詩も多く作っている。それまでの「隠者」のあり方から離れて、処世観の上でも新たな規範を示すことになった。享年六十四。

「五柳先生伝」に色濃い儒家思想

庭に五本の柳を植えていたので**五柳先生**ともいわれた陶淵明には、自らが理想とする人物像や生き方を表明した散文「**五柳先生伝**」がある。



五柳先生（部分）横山大観画

中国が南北に分かれた六朝時代に、北方出身の貴族が「玄学」を好み老莊思想に傾倒するなかで、南方豪族の流れを汲む淵明の自画像として書かれた「五柳先生伝」には、「論語」をはじめ、儒家の古典からの引用が目立つ。

このなかの一説に「書を読むことを好むも、甚だしくは解することを求めず。意に会すること有る毎に、便ち欣然として食を忘る」とある。当時、文字の詮索に終始する学問を「章句の学」といったが、陶淵明はそうした方向でなく、真の意味を悟ることを重視した。人生の哲理や深い真理は、突き詰めることよりも、むしろ放棄するところに、かえって見出せるという考えであろう。

「菊を採る東籬の下

悠然として南山を見る」

陶淵明の代表作を掲げてみる。一見、のんびりとした雰囲気の中に、鋭い風刺がこめられている。「菊を採る…」の二句を知る人は多い。

飲酒二十首 其の五

結廬在人境 廬を結んで人境に在り
而無車馬喧 而も車馬の喧しき無し
問君何能爾 君に問う何ぞ能く爾と

心遠地自偏 心遠ければ地も自ら偏なり
採菊東籬下 菊を採る東籬の下
悠然見南山 悠然として南山を見る
山氣佳日夕 山氣日夕に佳く
飛鳥相与還 飛鳥相与に還る
此中有真意 此の中に真意有り
欲弁已忘言 弁せんと欲して已に言を忘る

【大意】

人里に家を構えているが、訪れる人の車馬の音も聞こえない。

どうしてそんなことが出来るのかと問えば、心の持ち方がもう俗世間から遠ざかっているので、住む場所も自然と田舎暮らしと同然なのだ。

東のまがきのもとで菊をとり、ゆったりと南の山を見る。

山のたたずまいは夕刻が最もよく、飛ぶ鳥が連れ立ってねぐらに帰る。

このなにげない自然の情景にこそ、人生の味わうべき本当の意味がある。だがそれを説明しようとしても、途端に言うべき言葉を忘れてしまうのだ。

このように突き詰めて表現せず、留保しながら余白を残すことで、かえってその「真意」の把握が可能になるので

は、と結んでいるのも風刺的である。

唐代以降高まる陶淵明への評価

陶淵明は同時代の人よりも盛唐、中唐以降の詩人からの評価が高い。

盛唐の大詩人・王維は五言古詩「偶然の作六首 其の四」で、また孟浩然は十六句五言古詩「仲夏漢南の園に帰^{ちゆうか}りて京邑^{きやういつ}の耆旧^{ききう}に寄す」で、さらに中唐の韋^い應物^{おうぶつ}、柳宗元^{りゅうそうげん}らも、陶淵明への思慕を語り、時代が下って、南宋の忠臣・文天祥の律詩「興を遣る」の頸聯^{けいれん}にも「何ぞ林下に從つて元亮を尋ねん」と陶淵明の名が出てくる。



五柳先生図（部分）雪村画